

滋賀大学教育学部附属特別支援学校

令和元年度 研究紀要



研究紀要の刊行によせて

今年度の研究においては、「心が動く授業」から「深い学び」へのみちすじを、《もう一步ふみ出す力》と仮定し、《4つの しん》をキーワードに課題を照射してきました。Round studyによる《めっちゃしゃべれる授業研究》も展開いたしました。ご講演いただきました名古屋恒彦先生のご助言をはじめ、大学教員との共同研究によるご指導を受け、研究がより一層深まりましたことを感謝しております。この研究紀要をご一読いただき、忌憚のないご意見をお寄せいただければ、それを励みにしていきたいと思っております。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますようお願いいたします。 滋賀大学教育学部附属特別支援学校長 若林千春



研究テーマ

<生きぬく力の育成>

ともに向上心を持ち続ける子どもを育む 授業実践研究 ～心が動く授業から深い学びへ～

小学部テーマ

子どもが思わずやってみたくなる
授業づくり

中学部テーマ

仲間と共にチャレンジできる
授業づくり

高等部テーマ

対話を通して学び合う
授業づくり

合同遊び
「ウォータースライダー」



生活単元学習
「中学部フェスティバル」



園児との交流
「アルミ缶リサイクル」



学校が
居心地の良い場所
になる支援

ありのままを
受け入れられる
集団での活動

さまざまな
対話を通じた
自己理解

安心

自信

発信

4つのしん
向上心

授業における子どもの心の動きを分析し、深い学びへどう導くかを検証する

2018年度研究 「心が動く授業」を通して本校が育てたい資質能力とは。

「授業力の向上」を目指した授業実践研究では、新学習指導要領のキーワードである「深い学び」へ向かう子どもの力を「もう一步踏み出せる力」と一旦定義し、その内容の明確化と育成するための授業の在り方について検証した。「もう一步踏み出せる力」を引き出すための授業とは「喜びや驚きで心が弾む、不安や葛藤、期待のある楽しい授業」であると考えた。こうした子どもの内面を揺さぶるような授業を「**心が動く授業**」と定義し、それを目指して教員全員が研究授業を行い、Round Studyでの事後研究会を実施した。

授業研究や学部間の系統性を検討する中で小学部で「安心」、中学部で「自信」、高等部で「発信」を積み重ねることが「もう一步踏み出す力」を言い換える言葉として「**向上心**」につながるのではという新たな仮説に至った。さらに研究を進める中で「安心・自信・発信」はどの学部でも重要な要素であり、それぞれが絡み合う中で成熟することがわかった。

そこで、2019年度は、各学部のキーワードをテーマに設定し、各学部で授業づくりについての研究を深めることとした。

安心 + 自信 + 発信

自分の居場所
が安心できる
場所になる

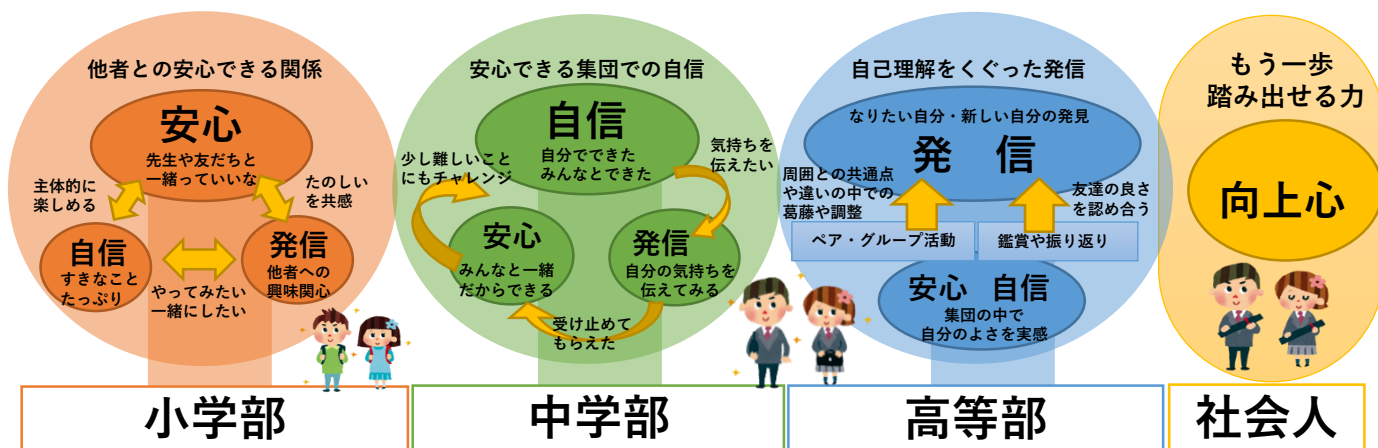
そこで経験を
積み重ね、
自信をつける

その中で
感じたさまざ
まな思いを
伝えられる

受け止められたうれしい気持ち

向上心

「こんな自分でありたい」と
自ら行動しようとする気持ち



2019年度研究

各学部段階で育成したい力を育むための授業づくりとは。

子どもが思わずやってみたくなる授業づくり

子どもたちが思わずやってみたくなる授業となるために、必要な安心へのアプローチについて検証した。 P3-4

仲間と共にチャレンジできる授業づくり

長年取り組んできた生活単元学習を土台に、自信につながる総合的な学習の時間の単元づくりに挑んだ。 P5-6

対話を通して学び合う授業づくり

「人と人が話す」だけでないさまざまな対話があることを押さえ、自己理解へつながる対話について検証した。 P7-8

成果と課題 2019年度の研究で、各学部がそれぞれのキーワードに焦点をしばって検証したことで、各ライフステージでの育成したい力と、そのための授業づくりへのアプローチが深められ、子どもたちの成長を確認できた。高等部卒業段階で自己理解ができる力へと導くためには、各段階において多種多様な集団での関わりが重要であることも再認識された。他者の存在に心地よさを感じ、安心できる仲間と経験を広げ、他者の良さに気付くとき「ありのままの自分」「自分のよさ」も受け止められる。そうした自己理解へつなげるためには、高等部の研究で注目した「対話」の力が不可欠であると考えた。対象（教材教具等）や他者（教師や友だち等）などの「さまざまな対話」を通して安心感を高め、自信をつけていく中で自己との対話（自分と向き合うこと）を積み重ねていくときに、自然と生まれてくる「こんな自分になりたい」という気持ちこそ「**向上心**」であり、本校の教育目標でもある「生きぬく力」へとつながると考える。私たちは、子どもたちから自然と生まれる向上心を信じて、日々の安心や自信、発信を積み重ねられるような授業づくりを推し進めていく。

本研究では、学部単位＝生活年齢での学びを軸に研究を進めてきた分、発達段階を踏まえた授業づくりを深める視点が弱かったことが課題と言える。そこで、今一度、発達の視点を押さえ、小学部→中学部→高等部という系統性も見据えた「対話」のある授業づくりの在り方を検証することを今後の課題とし、さらなる研究を推進していきたい。（文責 和田佑子）

めっちゃしゃべれる授業研究会を目指して Round Study 実践報告

授業の事後研究会の手法として、《Round Study》を採用し、2年間継続して取り組んだ。

Round Study の特徴

- ・少人数でのグループ論議を基本としながら、他グループの話題と比較検討してまとめられる。
- ・短時間でいろいろな意見を吸い上げられ、教師も主体的・対話的で深い学びを体験できる。
- ・授業研究会だけでなく、さまざまなテーマや生徒の学習活動にも応用が利く。



ホスト おもてなし役
役職に関係なく、みんなが楽し
く発言できるよう支援する。

<話し合うポイント>

- ①心が動いた場面 ②心が動いた要因 ③深い学びに導くためには（改善点）

Round 1 伝え合う



授業動画視聴後、ポイントについ
てグループでわいわい話す。
話した内容を大きな紙に記録する。

Round 2 異文化交流



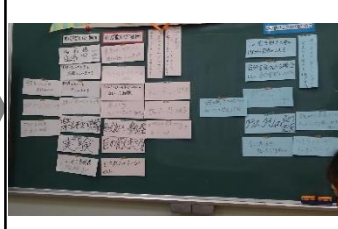
他グループのRound1の様子
を紙に記録されたことを参照
しながら聞き、語り合う。

Round 3 つなぎ深める



他グループでの論議を参考にし
ながら、自分のグループとし
ての意見を短冊にまとめる。

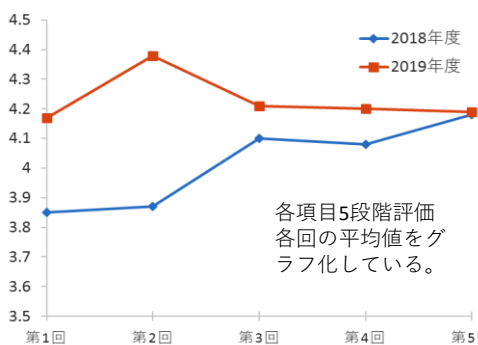
Final Round まとめ



短冊を示しながら発表し合う。
短冊を分類・整理しながら自由
討議を行う。

1年目は、学部単位（10名程度）で研究会を設定し、一人一授業研究を行った。振り返りとして各回の終了後にルーブリック評価・自由記述のアンケートを取ることを積み上げていった。3～4名程度のグループでの話し合いは、全員に話す機会があり、些細な気づきにも目を向けることができた。また、他グループでの話にも触れる中で、意見の共通点、相違点が明確に意識できた。特に、全校研（30名程度）や縦割り研など大人数で実施した研究会では、さまざまな視点から論議に広がりや深まりがあり、Round Studyが有効であったことが窺えた。何より話が盛り上がるのが特徴であることを身をもって感じた。何を深めたいのかをあらかじめ共通認識しておくことが必要であることを確認した。

ROUND STUDY ルーブリック評価平均値



2年目は、1年目の縦割り研究実施に出た「他学部の授業は知りたいけれど自分の学部の研究会の積み上げもしたい」という意見を受け、2つの学部が研究会をし、残りの学部が2つに分かれて参加するという形を採用した。また、全校での授業研の機会も増やし、小・中・高の系統性も意識できるようにした。ルーブリック評価の平均値の推移を見ると学部毎で取り組んだ2018年度と比べ、2019年度は4.2前後で安定している。ある程度人数が確保されること、さまざまな学部の教師が混ざり、話し合うことで高い評価が維持できたと分析する。

また、Round Studyで話題にあがった心が動いた場面やその要因、ルーブリック評価の集計結果、自由記述として書かれた内容を整理分類して、各研究部員が「研究通信」として毎回発行した。授業の様子は動画で共有しているが、改めてその場面を静止画にして記録することで、その瞬間の子どもたちの視線や表情、しぐさなどから心の動きを再認識できた。自由記述には、研究会で学んだこと、Round Studyをしてみたの感想や改善点などさまざまな視点での意見があり、授業者はもちろん関わった教員が次の授業や単元、他教科とのつながり、学部間のつながりなどを考えるきっかけとなった。短時間での研究会だけでは得られない深みが振り返りで補われたと考える。



生活訓練棟にじの家での事後研究会



校長先生もホストになって短冊発表

研究通信（一部抜粋）
Round Studyで話題になった子ども
たちの心の動きが振り返れる。



1 年次の成果と課題

子どもたちのやる気を引き出し「やった・できた」につながる授業づくりには、①子どもたちが好き・興味のある活動、②失敗を気にしなくて良いダイナミックな活動、③わかりやすい歌やリズムのある言葉、④目や耳で捉えやすい教具、⑤本物に触れることが重要で、それらを組み込み、展開させることが大切である。

そうした授業を通して、相手への安心感や信頼感が生まれ、次の活動にも自分から取り組もうとする姿が多く見られた。

課題は①子どもたちの心の動きの指標が曖昧で、評価がしづらいこと、②発達段階や学年など実態がさまざまな子どもたち全員の表現をどのように引き出すか、その時間や場所の確保の難しさが挙げられた。



小学部 テーマ

子どもが思わずやってみたくなる授業づくり

目指したい子どもの姿

小学部での育みたい子どもとは、教師や友だちなどの集団に安心感をもてる子どもである。

「たのしい」「うれしい」だけでなく、「いやだ」「こわい」などの気持ちを自分なりに表出できる力は、将来、生きていく上で大切な力となる。そのためにも、まずは、人を意識し、「だれかと一緒にいいな」と思える子どもを目指したい。

だれかと一緒にいいな



集団への安心感

2 年次の研究概要

今年度は、学校が安心できる、居心地のよい場所になるために、子どもたちが思わずやってみたくなる授業を作りながら、安心へのアプローチについて検証した。

年度当初の不安な様子



思わずやってみたくなる授業の積み上げ



安心して楽しむ様子



☆授業づくりは授業以外の時間から

- ・休み時間や給食などの子どもの様子から見てきた好きな物・興味関心を授業に組み込む。
- ・教師の複数の目で多角的に子どもを捉えることで、子どもの「やりたい」を見極める。



☆ありのままの感情の受けとめ

- ・うれしさ、楽しさ等のプラスな気持ちだけでなく、不安・悲しさ・怒り等のマイナスな気持ちも受けとめる。
- ・「どんな気持ちでも受けとめ、共感してもらえる安心できる場づくり」をする。

☆適切な支援の見極め

- ・手をかす、寄り添う、背中を押す、見守る等さまざまな支援の中から、今、必要なのはどの支援なのか、将来を見据える視点を持ちながら探り、見極める。
- ・不適切・過剰な支援ではないかを意識する。



やってみたい



☆わかりやすい授業の追究

- ・授業の大まかな流れを固定化し、その内容を分かりやすく提示する。
- ・言葉での指示を減らす工夫（見てわかる、音楽でわかる等）で、促されなくても、自分から活動に向かえるようにする。

子どもの具体的な姿

☆いっぱいの不安を具体的に解決

入学当初、学校生活が不安でいっぱい。電子黒板を小学部全員で集まって見ることを嫌がり、教室に入れなかったが、廊下から気にしている姿があった。

そこで、具体的に不安を聞き取り、不安要素を取り除くための方法を一緒に探り続け、「ここから見る」「何時まで見る」など、小さな「できた経験」を積み重ねてきた。今では、教室内で映像や人との関係を楽しみながら学習できるようになっている。



☆思いを言語化して共有

言語での表出が難しい児童。年度当初、思いが伝わらず、離席する、叫ぶ、つねる等の行動があった。しかし、相手が話していることは理解できていることに注目。言葉にならない児童の思いをくみとり、言語化して本人に伝え、その思いに寄り添うことを徹底した。あわせて、相手に伝える方法を模索し、「伝わった」という喜びの経験を積んだ。すると、一緒に遊びたい教師の外靴を持ってきたり、遊びたい場所へ手を引いて連れて行ったり、「こちょこちょ」「ブランコおしてください」と自分から言葉で伝えたりするようになった。自分の思いを相手に伝える方法を身につけたことで、伝わらない・もどかしい・悔しい思いをすることが減り、人と一緒に楽しく過ごせる時間が増えた。



2 年次の成果と課題（深い学びへ導くためには）

思わずやってみたくなる授業＝安心〈人・場所・流れ〉＋自分の好きなもの・興味のあるもの

小学部では、子どもたちが好きなことや安心できることを見つけ、大切にすることが重要である。授業の中で好き・興味を広げていくことで、「嫌なことがあっても、これがあれば大丈夫」というものを増やすことが、生活の中での喜び、生活そのものの豊かさになり、将来の支えになっていく。

今年度、「思わずやってみたくなる」をテーマにしたことで、おもしろい、楽しい、驚きなどを練り込んだ授業づくりができた。また、教師自身が楽しみながら授業をすることで子どもたちが楽しめる授業になるのだということも実感できた。

「心が動く」や「思わずやってみたくなる」の基準が曖昧なことが課題であったが、だからこそ教師間で深く話し、視野を広げることになった。正解がない、見えないからこそ、話をすることで見えてくるものがあることもわかった。そして、言葉がけのタイミングや子どもたちとの気持ちの重ね方など、授業以外の時間も、授業づくりの時間なのということも、再認識できた。

小学部での「思わずやってみたくなる」授業で、安心感と、興味関心、意欲を広げる学びが、中学部から高等部、そして、社会で生きぬくための大切な土台となることを意識し、これからも授業づくりや支援をしていきたい。

1 年次の成果と課題

中学部では「仲間とともに」という学部目標を掲げていることから、授業においても「仲間」を意識した学習の姿がたくさん見られた。こうした学部集団＝“ありのままでいられる”という安心感があり、そこに発達段階に応じた魅力ある教材が提示されることで、生徒たちの「やってみたい！友だちみたいにしてみたい！」という主体性が引き出されることが分かった。また、生徒たちが実感をもって「できた」と思えたことが仲間共感され、認められることで、「自信」へとつながることも分かった。さらに「自信」がもて、少し難しい課題にチャレンジすることで「共感してほしい」「頑張りを知ってほしい」などの思いが、発信したい気持ちの芽生えになった。



目指したい子どもの姿

中学部で育てたい仲間とは、物事を「できるできない」で判断するのではなく、一人ひとりがやりがいをもって取り組んでいる姿を見て、互いに「お！」「やった！」と認め合えるような集団である。そんな集団＝安心できる仲間の中で「僕って、私って、このままでいいんだ」と実感することが“自信”を育むと考える。一人ではハードルが高いことにも仲間と一緒にあれば挑戦できる。ありのままの自分に自信をもってチャレンジできる姿を目指したい。

“ハードルの高いこと”にも
チャレンジ



中学部 テーマ 仲間と共にチャレンジできる授業づくり

2 年次の研究概要

今年度は、中学部ならではの取り組みである生活単元学習と総合的な学習の時間を切り口に、年間のつながりを意識して「仲間とともに育む自信」について研究を進めた。

☆仲間づくりの土台は『生活単元学習』



4月 地域探検を通して
最初の集団づくり



6月・10月・12月の3回にわたり、クラスの仲間と、
<計画→実行→振り返り>のサイクルを繰り返しながら、
やってみたいことを実現する。
クラス集団の育成・絆の深まり



全員で作り上げる劇発表
仲間との挑戦

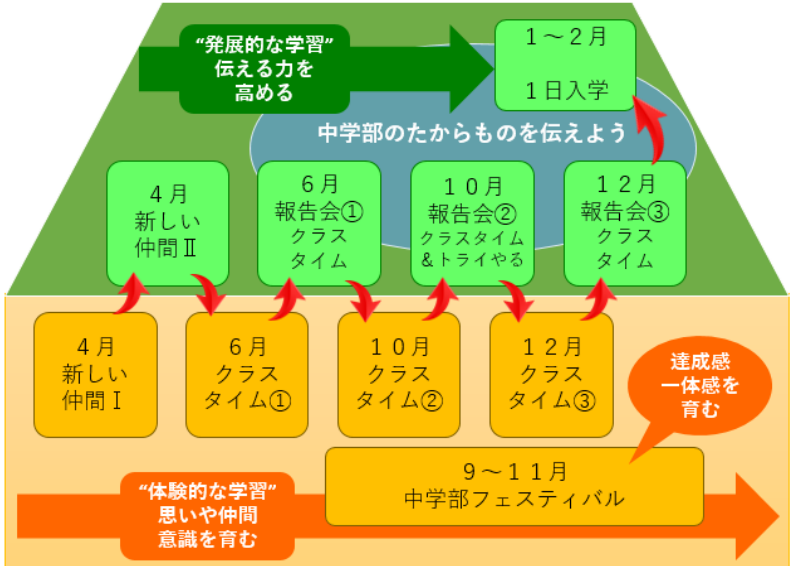
☆土台を生かした『総合的な学習の時間』作りへ

<総合的な学習の時間>

自分の思いを表出したり、相手の思いを受け止めたりすることに課題の多い生徒たち。仲間と協力して挑戦できる表現の場として、『中学部のたからものを伝えよう』という単元を新設した。

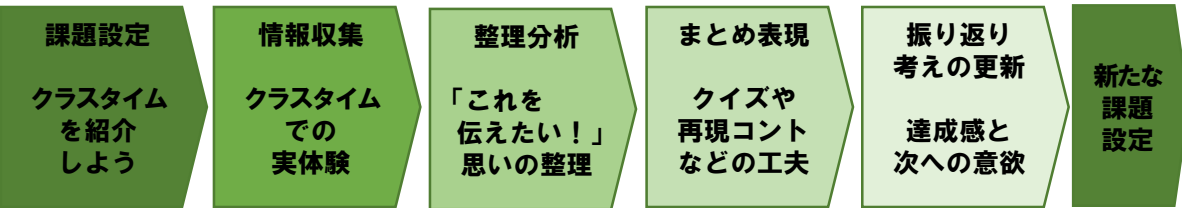
新入生に『中学部の良さ』を伝えることを最終目標として設定し、生単での楽しい経験を伝える活動を積み重ねるサイクルを作った。

ここでの挑戦が、次年度の仲間づくりの始まりになることを期待している。



☆『中学部のたからもの』の探究サイクル

<各教科・各教科を合わせた指導>



子どもの具体的な姿



「うえ～」「あ～」と関わり
合う二人 笑顔があふれる

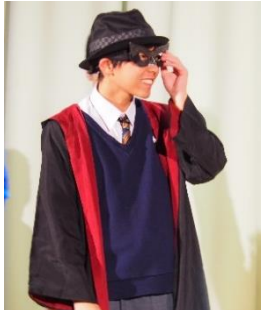
☆Aのありのままの姿が、仲間を思う気持ちを生む

1年生のAは、発語はないが「あ～」などの発声で友だちに関わりを求める。入学当初は小学部の時から知っている相手限定だったが、徐々に興味が広がり、いろいろな生徒へも関わりを求め始めた。最初は、Aからの関わりに戸惑いを見せた生徒たちも、同じような発声で返すと嬉しそうなAの様子を見て、積極的に関わられるようになった。

2年生のBは、1年時は自分の興味ばかりで、自分に得がないことは「なんでせなあかんの」という態度だった。今年度、Aと同じクラスになり、さまざまな行事を共に経験する中で、新しい場面に戸惑うAに自然と「手伝おうか」「一緒にしようか」と寄り添う姿があった。Aがどうすれば笑顔で過ごせるかを考えることが、仲間を思う気持ち、誰かのためになりたいという気持ちを育んだ。

☆殻を破りたいC

3年生のC。中学部入学当初は口数が少なく消極的な性格だったが、日々の生活を送る中でだんだんと自分の思いを言葉にし、主体的に活動する姿が増えてきた。今年度は中学部最後ということ意識し「自分の殻を破る」を自己目標に掲げ、生徒会副会長にも挑戦している。人前に出ること苦手意識があったCだが、不安なときには「自分の殻を破る」という目標を呪文のように唱え、一つずつ乗り越えている。そんなひたむきに頑張る姿に周りも刺激を受け、一緒に挑戦しようとする3年生の仲間、「あんな先輩になりたい」と憧れを持つ後輩たちの姿も多く見られるようになった。特に2年生は「副会長立候補してみようかな」「Cくんみたいに喋れるようになるかな」と、自分の未来の姿を先輩に重ねて想像している発言が増えている。



文化祭の生徒会劇の一場面
怪盗役になりきった

2 年次の成果と課題（深い学びへ導くためには）

総合的な学習の時間の単元の新設について、本校の生徒にとって探究のサイクルが機能するかが課題だったが、生単での充実した経験が下支えとなり、主体的に活動できた。実体験で情報収集し、伝えたい内容を整理し、どんな方法で伝えるかを考えるという一連の流れは、生徒にとって見通しがもちやすかった。

また、一回目は「動画が面白かった」など個人の感想に留まっていた振り返りも、二回目は「コントが面白かったから、今度はやってみよう」と聞き手を意識して工夫しようとする姿があった。クラスタイム当日にも「これクイズにできそう」とアイデアを出し、自ら写真を撮りながら情報収集しようとする生徒もおり、探究心の芽生えが感じられた。

2月に控える「一日入学」は、伝える相手が馴染みのない「新1年生」であり、“充実した経験”を共有していないという難しさがある。何をどう伝えるかを試行錯誤することが、これから身につけたい「発信力」につながると考える。これまで培った「伝えたい思い」を生徒たちなりの表現で形にし、自分たちの中学部に自信と誇りがもてるよう支援していきたい。また、今年度見えてきた探究サイクルを、今後も毎年繰り返すことで、より良い形へと成熟させていきたい。



1 年次の成果と課題

昨年度、高等部は「発信」をテーマに研究を進めてきた。発信する内容は、今までの経験を通して考えたことであり、さまざまな体験や経験の大切さを確かめ合った。さらに、友だちの意見を受けて、新たに発信をする姿があり、発信を通してどのように考えるかに注目していくことを共通理解した。発信を「言葉」にこだわらず、絵や楽器、カードなどのツールを使ったり、生徒の表情や目線、動きから自分の思いを発信していると捉えることで、教師側も構えずに考えられるようになった。

しかし、グループや集団で、自分から発信することが苦手な生徒もあり、どのような支援が必要か、どのような集団であれば自分を発揮できるのかが課題になった。また、どのような取り組みをすると、活発な発信が起こるのか、授業内容の改善や教材の工夫をした。



高等部 テーマ

対話を通して

目指したい子どもの姿

自分のことを安心して表現するためには、自己肯定感が土台として必要と考える。その土台があることで、自分の成長を感じ、自分のことを理解できるようになる。しかし、そのためには集団の力が必要であり、集団の中で認め合うことで、新しい自分に出会うことができる。これらを踏まえて、卒業後の進路について、自分で選び、決める力をつけられるようになってほしい。

クラス
学年の枠を
超えて

自己理解・自分の成長を実感する

- ・自分で決める、自分を表現する
- ・自分を見つめる、ふりかえる
- ・なりたい自分を見つける、あこがれる



集団で取り組む達成感

- ・仲間の中で気付く自分
- ・共感
- ・仲間を認め、仲間から認められる



自己肯定感・自尊感情

- ・人との関わりの中で自分を感じる
- ・安心感



学び合う授業づくり

2 年次の研究概要

今年度は、昨年度の発信をさらに発展させ、発信されたことをどう受け止め、次の発信にどうつなげていくのかという「対話」をキーワードに深く学び合う姿を目指した。

☆「対話」を研究するにあたって

対話＝言葉だけでない、**いろいろな形がある。**

対話を授業に設定することがねらいではない。



授業の中で
自然と
生まれる対話

研究を始めるにあたって、対話について共通理解を図った。いろいろな対話の形について、授業の中から明確にしていく。

☆授業の中で見られた「対話」とは・・・

発表形式、グループでの話し合いなど他者との関わりを基本とした対話以外にも、試行錯誤しながら作品を作る姿や友だち同士の対話をそっと見守り自分の出番を待つ姿など、生徒たちは様々な場面で自分の心や教材と対話していた。

そこで、授業の中で見られた対話を

「対象との対話」「他者との対話」「自己との対話」に分類した。この3つは、交互に関わり合いながら授業で展開していることがわかった。



対象との対話



自己との対話

他者との対話



☆授業で「対話」が生まれるためには・・・

話し合い活動の対話

- ・人間関係を考慮したグループ
- ・先輩、後輩でのペア活動
- ・各グループの途中経過を報告

発表形式の対話

- ・心動かされる体験
- ・必然性のある内容
- ・聴いてくれる人の存在

自己や対象との対話

- ・自己解決できそうで、ちょっと難しい課題設定
- ・質の高い教材、生徒に合った題材
- ・心の葛藤を見極め自己解決を待つ

対話を通して、他者の姿に刺激を受けたり自分と比較したりすることができた。友だちを通して自分を見つめ、自分とはどんな人間なのか考える姿があり、「もっとよくなりたい」と求める姿が見られた。友だちとの違いを認め合うことが、自己理解につながり、自己肯定感が高まっていった。

子どもの具体的な姿

☆自分をみつめたAさん

Aさんは、入学当初活動に参加しにくく、教室の隅でうずくまり集団の中でスムーズに動くことが難しかった。1年生の2学期、登山合宿で自分の配属された班のコースに納得がいかず、自分の班の変更を申し出た。教師との話し合いの結果、普段の生活を見直すことを決めた。毎週目標を設定し、週末に振り返りをする取り組みを続けている。2年生では、生徒会執行部に立候補した。登山のコースもステップアップした。自分を見つめる時間を日常的にもったこと、集団の中で友だちを通して自分を見る経験を積んだことで、なりたい自分を見つけることができた。



☆仲間の中で苦手を克服

Bさんは歌うのが苦手であり、1年生の音楽の時間はマスクをして歌うことはなかった。しかし、仲間と一緒に音楽を楽しむ中で、自らマスクを外して歌うようになっていった。今では手を使いのびのびと歌っている。また、Bさんは名前を覚えるのも苦手であった。友だちとの関わりがきっかけになり、今では友だちを名前で呼ぶようになった。

Cさんも歌うことが苦手である。文化祭の練習で、友だちの姿を見たり、励まされたりしたことで、自分と対話し、徐々に歌えるようになった。振り返りで『とても緊張したけど練習していくうちに歌えるようになった。みんながいたから、歌えるようになった。』と感想に書いていた。生徒たちは授業以外でも、さまざまな形で対話を繰り返したことで心に変化が見られ、よりよい自分をめざし葛藤している。そして、少しずつ自信をつけてきている。



2 年次の成果と課題（深い学びへ導くためには）

高等部で目指した自己理解は、自分とは違う仲間がいることで促され、次第に形成されていくものである。自分を認め、受け止めてくれる仲間の存在は、自然と「自分とは何か」を考えるきっかけになった。他者との対話を通して自分とは違う気持ちや考えを知り、人のおもしろさを実感できた。また、集団の活動が苦手な生徒が多いが、自ら関わろうと発信し、主体的に働きかけるようになった。授業をクラスや学年の枠を超え、さまざまな関係性の集団で行うことで、いろいろな人の考え方に会い、自分の考えを深めていくことができた。

対話が生まれる課題設定や環境を整備することで、自然と対話が生まれた。また、生徒の自己との対話を妨げないよう、表情や身振りなどを観察し、教師も生徒たちと対話していくことが大切である。生徒同士の聴き合う関係を育むために、教師自身が日々聴く力を磨いていきたい。

高等部は卒業後について思い悩む時期である。対話を通して身につけた力は、自分のやりたいことを見極め、進路選択の自己決定につながる。「なりたい自分」の実現のためにはどうすればよいか、集団の中で対話しながら求めていく生徒の育成をさらに目指していきたい。



小学部 生活単元学習（にじの家合宿）

単元名「じぶんのことはじぶんでしよう」

発達年齢 3歳～4歳
4年1名 6年3名
計4名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：一日の生活に見通しをもち、身の回りのことに自分で取り組む力>

にじの家合宿は、買い物や調理、掃除、入浴、就寝の準備など、身の回りのことを自分で取り組むことを目標にした学習である。滋賀県在住の5年生を対象とした宿泊行事を控える4年生と、最高学年である6年生を対象としている。本時では事前学習として、合宿当日の買い物や調理に向けて、役割分担やスケジュールを確認する。6年生は食に関心が高い一方、4年生は偏食傾向が強い。そういった実態を考慮するため、食材への意識や活動への見通しがもてるよう「わたしのやくわりカード」を用いる。食材や調理の写真・絵カードから活動をイメージすること、また、カードを操作することで言葉で思いを伝えにくい児童でも自分の気持ちや思いを表出させることをねらう。



本時の目標

- 知技 カードを用いて、自分の役割をまとめることができる。
- 思判表 一日のスケジュールに見通しをもって取り組むことができる。
- 主体的 身の回りのことを自らすすんで取り組むことができる。

支援の3つのポイント

- 安心 自分の役割をまとめたカード
- 自信 視覚支援で当日の活動をイメージ
- 発信 関心の高い食を題材にする

心が動いた場面（抜粋）

6年生の写真で振り返り



これは、お風呂！

6年生は4年生の時に、にじの家合宿を経験しているため、当時の写真を用いて事前学習を行った。自分や友だちが写っていることで関心や安心感をもつことができた。食事の写真から、期待感が膨らんでいる様子だった。

スケジュール表を作る場面



寝る前に布団の準備！

文字が読める児童、絵や写真から理解できる児童、時計が読める児童、それぞれの力を合わせて作り上げることで合宿に対する見通しがもてた。手を動かすことで集中した取り組みができた。項目に合った写真を探している児童の姿があった。

やくわりカードが提示された瞬間



ぼくは、お芋を買う！

写真や絵カードで自分の役割が一目でわかるようにした役割カード。直感的に「やきそばをつくろう！」と食材の組み合わせを自分で作った児童や、自分の食べられる食材を慎重に探している児童など、それぞれの気持ちの表出がみられた。

買い物当番を決めていた時



ぼく、お肉は食べられないの？！

役割カードに貼られた食材が自分の食べるものだと思っていた児童。買い物当番でないお肉カードを剥がされて「自分はお肉が食べられない!？」と混乱してしまうことに。不安な気持ちを態度で表現できた瞬間になった。

深い学びへ導くために（成果と課題）

食材カードから児童自身が料理を想像して組み合わせることができた。「わたしのやくわりカード」は視覚的支援の効果が大きく、当日の買い物や食事を意識し、楽しみにしている児童の姿があった。事前に食材を把握していたことで、自分の食べられるものがあることに安心感をもち、当日の活動に参加することができた。作成したスケジュール表で、取り組みがひとつずつ消化されていく様子を確認し、一日や活動の終わりについて見通しをもつことができた。

事後研究会では、小学部の子どもたちの食への関心の高さが話題にあがった。そうした実態から、今後は買い物と食事に重点を置いて気持ちのやりとりをする時間をたっぷり確保したい。イラストの網やお皿に食材カードをのせる等、ツールの提示の仕方を工夫することでより料理の様子をイメージしやすくしたり、年度毎の対象児童の力に応じて、児童自身で決めることのできる範囲（料理の内容や品数等）を臨機応変に展開できる活動にしたい。

小学部 遊びの指導

単元名「先生と一緒に遊ぼう！」

発達年齢 1歳半～3歳

1年生3名 2年生2名

3年生2名 4年生1名

計8名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：人と関わる力>

対象児童は、全員自閉症スペクトラムの障がいがある。どの児童も、遊びの興味関心の幅が狭いが、好きな遊びには意欲を高め、積極的に取り組むことができる。粗大運動はおおよそできるが、障がいの特性から自己の身体に対するイメージが弱かったり、感覚過敏であったり、教師に身を委ねることが容易にできなかったりする児童もいる。

この単元では、身体を使ったやりとり遊びで学習を展開する。はじめに、音楽に合わせて全身くすぐり遊びを行い、スキンシップを通して安心と期待を児童にもたせる。次に、背中を感じる遊びや回転刺激を楽しむ遊び、相手に合わせて動作する遊びを児童に選ばせる。最後に全員で手をつないで教室をぐるぐる回り、ダイナミックな「動」の動きを楽しんだ後、リラックスタイムで「静」の感覚を味あわせる。これらの学習を通して、人と関わろうとする力を育てたい。

本時の目標

知技 活動の見通しと内容を理解し、体や手指の使い方がわかる。

思判表 教師と一緒に体を動かす面白さ・楽しさを広げ、やりたい気持ちを伝える。

主体性 友だちと一緒に活動に向かい、集団で学習する楽しさを味わうとともに、学習に向かう態度を養う。

支援の3つのポイント

安心 安心して取り組める集団の場づくり

自信 できた！楽しかった！気持ちの共有

発信 発信を細かく読み取り、次の活動につなぐ

心が動いた場面（抜粋）

遊びを提示された場面



やった～！

繰り返しの活動で、見通しや期待感、安心感を児童らがもっていたから、絵カードを見るだけでワクワクした。「好き、気持ちいい、やりたい」気持ちが溢れる遊びの場が設定できた。

自分で遊びを選ぶ場面



活動を繰り返す中で、もう一度やりたいと思う、気に入った遊びがあった。カードと遊びを繰り返し提示しながら、教師とカードを介してやりとりした。

こっち（指差しで）

身を任せてみた場面



大丈夫かも・・・

初めは怖いと思っていたけれど、本人が安心できる体位から始め、ゆっくりたっぷり触れ合うことで、心地いい感覚を味わえるようになってきた。「やってみたらできた。」の経験が積めた。

先生や友だちと一緒に遊ぶ場面



わ～い！やってやって！

赤いマットが出てくると自分から寝転び出す子どもたち。同じ流れを繰り返す中で、もっとして欲しい気持ちを言葉や行動で表すことができた。全教師が全児童に関わり気持ちの共有が充分できた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

授業では、見通しのある繰り返しの活動の中で、自分からマットに寝転んだり、自分の選んだ遊びができて喜んだりする児童や、はじめは傍で見ていたが教師に身を任せて遊びに挑戦した児童がいた。その一方で、自分の気持ちを表出したものの、授業者がそのサインに応えられず、十分に遊びを楽しむことができない児童がいた。授業研究会で改善アイデアをもらい、次の授業では、自分がやりたいと思った時に気持ちを表現し、それに対して教師が確実に応える環境を工夫した。具体的には、自分の写真カードをやりたい遊びのカードの下に貼り、自由に意思表示をする時間を一斉に設けた後、遊びに取り組んだ。その繰り返しの中で、さらに遊びたいという児童が増え、ほとんどの児童が全ての遊びに挑戦し、主体的な児童の姿を引き出した。このような自由度のある授業づくりが、思わずやってみたくなる気持ちを高め、児童の興味関心や人との関わりを広げる工夫の一つになることが明らかになった。今後の単元等でぜひ生かしていきたい。

小学部 からだ 単元名「楽しみながら一緒に体を動かそう」

発達年齢 **1歳～4歳**

1年3名 2年2名 3年2名

4年1名 5年3名 6年3名

計14名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：様々な体の使い方を知り、大人と一緒に活動できる力>

小学部の児童は好きな運動がそれぞれにあるが、一人で完結してしまうものが多く、人との関わりが少ない。しかし、安心できる大人と一緒にあれば経験を広げられる。本単元では、大人との安心できる関係の中で、少しでも自分からやってみようと思える支援として、年度当初より以下の2点を仕組み積み上げてきた。①活動のきっかけを音楽にし、口頭指示を減らす（始まりの曲、サーキットの曲を固定）。②活動の動機づけを明確にする（「パンダ体操は家族とする」「パラバルーンは運動会で発表する」等）。本単元では、パンダ体操を軸に授業を組み立てる。パンダ体操は絵本で導入でき、運動の苦手な児童にとっても「やってみよう」と思える。また、体操1つずつにシンボルがあり、口頭指示がなくても理解しやすい。本時は、参観日で保護者と活動する。安心して家族とも「やってみよう」という気持ちにつなげたい。

本時の目標

知技 体の使い方を知り、お手本を見ながら同じ動きができる。

思判表 順番や約束を守って、学習に取り組める。

主体的 友だちや教師、家族と一緒に運動を楽しもうとする。

支援の3つのポイント

安心 繰り返し何度も取り組んでいる内容

自信 安心できる内容・活動の積み重ね

発信 基本（できる）から発展（もっとしたい）へ

心が動いた場面（抜粋）

パンダさんが登場したとき



ぱんださ～ん！！

パンダ体操にちなんで、教師がパンダに変身して登場。どこから出てくるかわからないワクワク感や、これから楽しいことが起こりそうという期待感を生み出すことができた。

音楽で切り替わるサーキット運動



この曲はぴよんぴよん♪

曲によって活動が切り替わることで、自分たちのタイミングで運動に向かっていた。「この曲は飛び跳ねる」「この曲はラダー電車だ」等見通しをもち、主体的に活動できた。

魅力ある教材が出てきたとき



ふわふわのしい～♡

パラバルーン、デカパン、跳び跳びステップなど気持ち良い感覚を味わったり、人とする喜びを感じられたりする教材が多く、「思わずやってみたくなる」につながっていた。風を感じる時、動く時、注目する時など活動にメリハリをつけた。

家族と一緒に運動している場面



家族と一緒に♪

学習の流れを固定したつくりと繰り返してきた活動。安心と自信が積み重なり、大好きな家族と一緒にすることを楽しみにしていた子どもも多かった。家族との活動の中で自然に笑顔が溢れていた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

今回の授業で、子どもたちが思わずやってみようと感じた一番の要因は、パンダに扮した大人を登場させたことである。子どもたちがよく知っている先生がメイクすることで安心感と期待感を同時に与えられた。その結果、参観日という普段と全然違う環境であっても40分間集中が続いた。事後研究会では、サーキットの内容の充実が課題として挙げた。サーキットは授業の導入であり、取り組みやすいように簡単な動きの組み合わせにしていた。今後、身体の動きや柔軟性を伸ばしていくためにも、もぐる、飛び降りるなどのバリエーションを増やしたり、絵や写真を貼って動きを自分で判断して活動できる環境にしたりすることで、さらに幅のある授業になると考える。

最後に、子どもが楽しむためには教師自身がその授業づくりを楽しむことが大切だと感じた。教師が授業を楽しむことで、教師に遊び心や意外性、発想力などが生まれてくる。今後も意識して教師も子どもも楽しめる授業づくりを続けたい。

小学部 生活単元学習

単元名 みんなで こねこね！うどんづくり

発達年齢 **1歳半～3歳前半**
1年生3名 2年生2名
計5名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：新しいことに前向きに取り組もうとする力>

対象児童は、麺類が大好きである。そこで、本単元では、感覚遊びと調理活動を合わせた「うどんづくり」を設定した。第一次では、単元の着地点である「みんなでうどんを味わう」体験をした。第二次では、食材の買い出しに行き、第三次である本時では、その材料を使って、うどんづくりに取り組む。

児童によって感覚への意識はさまざまで、汚れることが苦手な児童もいる。しかし、いろんな仲間がいる集団だからこそ、みんなでひとつのことをやりきれたという思いや、不安なことや新しいことに取り組んでよかった、できた、楽しかったという思いを共有できる授業にしたい。



本時の目標

- | | |
|-----|------------------------|
| 知技 | 食材や道具に興味をもつ。 |
| 思判表 | 粉をこねる前と後の手触りの違いを感じる。 |
| 主體的 | 新しい活動に、前向きに取り組むことができる。 |

支援の3つのポイント

- | | |
|----|-------------------|
| 安心 | 見える・味わえる、活動の着地点 |
| 自信 | 繰り返し取り組んできた調理活動 |
| 発信 | 個の発信した小さなサインの受け止め |

心が動いた場面（抜粋）

一つひとつの活動で待つことができた場面



うどんのつくり方を子どもたちに説明してから数日間、教室前に、工程写真を掲示しておいた。流れをいつでも確認でき、子どもたちの見通しや期待感につながった。

このあと、こねこねするんだ～！

材料が出てきた瞬間



事前にうどんを食べること、材料を買うことを経験させていたことで、「うどんづくり」への期待感を高められた。「うどんが食べられる！」という楽しみをもって「うどんづくり」に臨めた。

しお、まてました～！

こねこねしているとき



生地をこねる感覚が心地よく、子どもたちが夢中になって楽しめた。みんなが好きで、作り方が単純な食べ物を作るという活動が、子どもたちの興味関心に合っていた。

こねこね、きもちいい～！

パスタマシンを使ったとき



全員がパスタマシンを使うことができた。自分ひとりで使える道具であり、手を動かすと生地が麺になるという変化や、生地をすべて麺にするという活動の終わりがわかりやすく、発達段階に合っていた。

いやだと言いながらもじっくり見えています！

深い学びへ導くために（成果と課題）

大好きな「うどん」をつくる活動を通して、クラス全員が学習に集中して取り組めた。自分が苦手な感覚でも、不安なことがあっても、「食いたい」意欲のおかげで最後までやりきり、みんなで一緒にうどんを味わうことができた。

事後研究会では、さらに安心して楽しめる手立てとして、感覚過敏や汚れたくない子どもへの配慮の重要性が挙げられた。また、同じ工程を積み重ねる中での子どもの変化を捉えたり、同じ工程で違う種類の麺類をつくって発展させたりするなど、安心感の中で自信をつけながら経験を広げていきたい。

子どもたちが夢中になって楽しめる授業づくりのヒントは、休み時間や給食など、授業以外のところにあるのだと改めて実感できた。そして、子どもたちが興味のあることや好きなことを見つけ、授業の中に取り入れることが、やる気を引き出す方法の一つであることがわかった。目の前の子どもたちの姿から、一つひとつの授業を大切に組み立てていきたい。

小学部 音楽

単元名「たくさんうたおう、たくさんならそう」

発達年齢 **1歳半～4歳**
1年3名 2年2名 3年2名
4年1名 5年3名 6年3名
計14名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：音楽を楽しみ、みんなと一緒に表現しようとする力>

音楽は、小学部全員で取り組んでいる。個々の意欲や関心に応じて音楽を楽しみ、自分なりの表現ができることを目指して、「あそぼう」「うたおう」「ならそう」の項目で授業を構成し、年間通じて活動している。本単元の「あそぼう」では、児童がケンステップを跳んだり、歩いたりする動きに合わせて音になる音遊びに取り組み、自由な音楽遊びの中で自分なりの表現ができる場としていきたい。「うたおう」では、やりとり歌の「おおきなうた」で、友だちや先生と一緒に歌う楽しさを味わわせたい。「ならそう」では、みんなが大好きな「おもちゃのチャチャチャ」の曲を用い、すず、タンブリン、マラカスから好きな楽器を選んで、それぞれの表現を引き出したり、音が重なる楽しさを感じさせたい。

本時は、2/3時である。学習の内容が分かって安心して取り組む中で、自分なりの表現が出せる場としていきたい。

本時の目標

- 知技** 教師や友だちと一緒に歌唱や合奏ができる。
- 思判表** 自分なりの表現方法で音楽の楽しさを表現する。
- 主体的** 歌唱や合奏を通して、音楽を楽しむことができる。

支援の3つのポイント

- 安心** 同じ流れで学習に取り組む
- 自信** 失敗のない学習活動
- 発信** 自分で選んだ表現方法

心が動いた場面（抜粋）

ドレミジャンプに取り組んでいる場面



できた～！

ケンステップを跳ぶタイミングに合わせてピアノの音が鳴るドレミジャンプ。順番は決めず、児童がやりたいタイミングで取り組むため、学習へ主体的に参加する姿と自由な表現を引き出すことができた。

ドレミジャンプを待っているとき



次はわたし！

友だちがドレミジャンプをしている時も座席で再現をしている場面。待っている間も音に合わせてポーズをとり、表現できた。また、気持ちの準備もでき、教師の言葉かけでスタートラインにたてた。

やりとり歌の様子



(おおきな)
おおきな！

歌や太鼓、タンブリンなど表現方法を選択させた。友だちが大きな声で歌っている姿を見て一緒に並んで歌っている様子。誰かと声や音を揃えて表現する楽しさを味わえた。

みんなで合奏



ばくも、やってみる！

演奏する楽器を選び全員で合奏した。自分なりの表現をそれぞれが行い、楽しい雰囲気の中で合奏することができた。友だちや先生がしている演奏の仕方を真似する姿も見られた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

授業を終えて、学習に入りにくい児童も含めて、全員が教室の中で活動に向かっている姿があった。その要因として、順番は決めずに自分のタイミングで取り組めるドレミジャンプのわかりやすくて自由な点や、表現方法を選べるやりとり歌の活動、好きな楽器で演奏できる合奏があげられた。児童は自由度のある活動の中で自信をもって学習に参加し、自分なりの表現を受け止められる達成感を感じることができた。深い学びに導くために、ドレミジャンプの音を変化させて興味を惹くことや、二人で取り組むなど難易度を上げて、挑戦したい気持ちを引き出すことがあげられた。また、合奏では演奏会の形にして表現したり、楽器ごとに合図に合わせて音を鳴らしたりして発展させていきたい。これまでの学習で、できた、やってみたいの気持ちを積み重ね、児童は音楽を楽しむことができた。今後は、みんなと一緒に表現できる力を育めるよう、児童が主体的に活動できる手立てを考え、授業づくりをしていきたい。

中学部 生活単元学習

単元名「新しい仲間パートⅠ～唐崎タウンウォークに出かけよう～」

発達年齢 1歳～9歳

1年6名 2年6名

3年7名 計19名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：自分の思いを表現する力>

新入生を迎えた中学部全体での最初の取り組みとして「新しい仲間」を設定する。1組・2組を基本に3年生がリーダーとして2つのクラスに入ってグループを作る。活動のねらいとしては、①学校のある唐崎の街を知ること、②中学部としての仲間意識を高めていくことである。

本時は事後学習の時間で、当日の活動（志賀の大仏まで歩く、クイズの答えを探すミッション、公園での遊び）を振り返り、楽しかったことをグループで協力して新聞にまとめ、その気持ちを共有することで、「仲間との活動が楽しい」「また行きたい」という気持ちを高め、次の「新しい仲間パートⅡ」への期待感をもてるような時間にしたい。



本時の目標

- | | |
|-----|------------------------|
| 知技 | 地域にどのような場所があるかわかる。 |
| 思判表 | 思いを自分なりに表現することができる。 |
| 主体的 | 新しい友だちや教員とのかかわりを深められる。 |

支援の3つのポイント

- | | |
|----|---------------------|
| 安心 | 表現方法が選べる グループでの活動 |
| 自信 | グループみんなで協力して仕上げる達成感 |
| 発信 | 写真を多く使用してイメージしやすくする |

心が動いた場面（抜粋）

答え合わせの活動



燈籠は…14?16?どっちが正解?
答えは…15でした!「え〜!!!」

グループ内で担当を決め、答えを探したクイズの答え合わせ。分担したことで、やり遂げたという達成感、グループに貢献できた満足感ももてた。最後まで答えがわからない面白みがあった。

写真で振り返る場面



「〇〇さんが滑り台してる〜!」
「俺が〇〇してるどころや〜!」

写真の中では、自分が主役であったり、ほかの友達は何をしていたのかを知れる楽しさがあった。また、たくさんの写真を大きな画面で共有する楽しさがあった。

新聞を作っている場面



「どの写真にしようかな〜」
「唐崎マンも描こう」

振り返りで使った写真を、一人4〜5枚にしぼって印刷しておいた。言葉or絵or文章or写真など、個人に応じた自由な表現方法が選べ、チームで協力して作ったことが達成感につながった。

大きな地図で考える



「ここが公園!」

大きな地図を作成しておき、チェックポイントを確認する活動を行った。少し難しい課題だったが、行ったことがある場所だったので、探そうという気持ちが高まった。

深い学びへ導くために（成果と課題）

年度初めは、自分の思いを伝える際に厳しい言動になる生徒もいた。そのため、相手のことを知って少しでも仲間意識をもてるように、事前学習から「グループ名決定の話し合い」「旗作り」「クイズの役割分担」に取り組んできた。当日には、クイズの答えを相談をしたり、励まし合って歩いたり、グループを超えて活動する姿も見られた。本時でも、意見や思いを出し合いながら、協力して新聞を作り上げる姿があり、完成した時には拍手が起こる取り組みになった。

一方、事後研究会において各グループでの取り組みに終始していたことが課題にあげられた。要点をピックアップして発表したり、お互いの新聞を見合ったりする時間を確保することで、さらに広く交流ができ仲間のことを知ることができたと思われる。また、少し難しい課題にはなるが、自分たちでクイズを作る話し合いや相手グループにそれを出し合う活動などに取り組めると、さらに交流が深められたのではないかと考える。

中学部 総合的な学習の時間

単元名「新しい仲間パート2～唐崎タウンウォークに出かけよう～」

発達年齢 1歳～9歳

1年6名 2年6名

3年7名 計19名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：友だちと関わろうとする力、課題を解決する力>

街探検第二弾として、4グループに分かれ、お菓子屋さんに「みんなで食べられるお菓子」を買いに行き、訪れたお店について他のグループに紹介する活動を行う。3学年を縦割りに分け、少人数グループで共通の目的意識をもち、協力して情報収集したり表現したりすることで、より仲間意識が広がることをねらう。

本時は第一次の事前学習であり、①誰とどこで何をするのか見通しをもつこと、②仲間と協力してお店のどんなことを知りたいかなど課題を設定することの2つをねらいとする。第二次では、実際にお菓子屋さんに出かけてお菓子を買うと同時に、お店調べをしたり、店員さんにインタビューをしたりして、報告会の準備を行う。第三次では、報告会を行い、他のグループの発表を見合ったあと、実際にお菓子を食べて、生徒間の親睦を深めることをねらう。

本時の目標

- | | |
|-----|---------------------------|
| 知技 | 毎日通う唐崎の街のことを知る。 |
| 思判表 | お店で见たいものや店員さんに聞きたいことを考える。 |
| 主体的 | 仲間と街探検をすることに期待感をもてる。 |

支援の3つのポイント

- | | |
|----|------------------|
| 安心 | 少人数の仲間での話し合い |
| 自信 | みんなで共通の目的意識をもつこと |
| 発信 | 写真や検索画面などの手がかり |

心が動いた場面（抜粋）

3つのヒントクイズ



ケーキ屋！

カレー屋！

どこへ街探検に行くのかを3つのヒントから考える場面。ヒントが増えるたびに発言が増えてきて、ワクワク感が高まった。抽象的なヒントからだんだん具体的なヒントになり、考えやすかった。

大きな地図で発見！



このマークって？！

新しい仲間パート1で使われていた大地図の中に、今回の行き先である（！）に気づいた瞬間。自分たちの知っている身近な場所が地図上にあることに気づき、発見できた喜びを感じていた。

行き先に注目



あのケーキ何かなあ？

ここ見たことある！

4つのお店について概要を紹介。画面に注目して、積極的に発言していた。複数の教材（地図・検索画面・写真など）が組み合わさることで、集中しやすい環境になった。

小グループでの話し合い



値段、聞いてみたい

4～5人のグループに分かれて話し合うことで、全体の場では発言できない生徒が自分の意見を言えた。少人数の安心感があり、自分の意見を受け止めてもらえるという気持ちが大きい。

深い学びへ導くために（成果と課題）

いかに生徒同士が協力し、自分たちの思いを伝え合おうとすることができるかという点に重きを置いて授業を行った。事後研究会では、心が動いた場面として「生徒が自ら考えようとしていた」場面や、「協力して課題を設定しようとしていた」場面があがり、期待感を持って学習に臨んでいる生徒の姿がたくさん発見された。また、子どもたちの「自分で調べてみたい」という興味や探究心を引き出し、生徒自らが実感する「身近」を広げていくことで、「地域」の認識が広がっていくのではないかなという意見もあった。課題を設定する際には「みんなが知りたい情報とは？」などの「聞き手の視点になる」という意識を持てるように促すことで、報告会に深みが出るのではという話も挙がった。実際の報告会では、グループごとに色々な発表形式で報告し合った。「次はあのお店に行ってみよう」や「あの発表方法おもしろかったな」など、生徒がそれぞれ感じ合うところがあった。生徒同士の思いを大切に、今後も経験を積み上げていきたい。

中学部 総合的な学習の時間

単元名「中学部のたからものを伝えよう」

発達年齢 1歳～9歳

1年6名 2年6名

3年7名 計19名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：課題を解決する力、まわりの人に伝える力>

本単元は、中学部の特色ある行事や活動を「たからもの」として発表したり紹介したりすることを通して、生徒の課題解決の力や表現の力を育てることをねらうものである。年間を通じて取り組む大単元であり、中学部の仲間に向けた報告会を3回経て、最終的には次年度新入生に向けての中学部紹介を行う。生徒のアイデアや「こうしてみたい」という思いなどを大切にし、生徒の特性に合わせた活動を展開することで、意欲や自主性を育みたい。

本時は第一次5/5時間であり、各クラスで計画し、出かけた「クラスタイム」での体験を報告する。これまで、クラス単位で、楽しかった思い出を「伝えたい」という気持ちをもって準備してきた。本時では、学部全体の仲間と共有することを楽しみ、互いのよさを評価し合うことで、今後の活動に対し、意欲をもって取り組めるようにしたい。

本時の目標

知技 自分たちの活動や体験をわかりやすく伝える。

思判表 互いの発表のよいところなどについて考える。

主体的 報告会に楽しんで参加しようとする。

支援の3つのポイント

安心 楽しい雰囲気、クラス集団での発表

自信 よいところを友だちに認めてもらうこと

発信 伝えたいような体験

心が動いた場面（抜粋）

他のクラスの活動を見ているとき



他のクラスが楽しそうに活動している様子を見て、「自分も行ってみたい」「やってみたい」という気持ちをもつことができた。

実験やクイズ



どのクラスも実験やクイズなど、見ている人も参加できるような工夫があり、わかりやすさや臨場感、ワクワク感があった。まわりの反応もよく、発表者も楽しく発表することができた。

友だちの応援



友だちがスポーツをしている動画。見ているうちに、次第に盛り上がってきた。発表者と聞く人との間に温かい雰囲気や一体感が生まれた。

いいところ見つけ



発表後、他の友だちから、よかったところについて、たくさんの意見が出た。それぞれが、発表の態度や工夫について考えることができた。また、友だちに評価してもらうことで、自信をもつことができた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

全体的に、温かく楽しい雰囲気の発表会で、生徒の発表に対する反応や聴く態度もよかった。「タウンウォーク」の発表体験などが生かされたのだと思われる。「またやってみたい」「自分たちの体験をみんなにも伝えたい」という自信や活動への意欲を多くの生徒がもつことができた。今後もこうした「積み重ね」を大切にしたい。

事後の研究会では、今回の発表を今後の活動につなげていくことが大切であるとの意見が出された。生徒たちからも「動画がおもしろかった」「次はクイズをしてみたい」などといった声が聞かれた。生徒が発表のよかった点や改善点について考えることや、他の発表活動とも関連づけることなどによって、発表スキルの向上を図ることが必要である。

「おもしろかった」をベースにしながら、そこからもう一歩進んで、「つぎ発表するときにはこんな工夫や改善をした」「相手にわかりやすく伝えるためにはどうしたらいいだろう」ということを、生徒が考えられるように支援したい。

中学部 生活単元学習

単元名「中学部フェスティバル～みんなで力を合わせて劇をつくろう」

発達年齢 **1歳～9歳**

1年6名 2年6名

3年7名 計19名

単元設定の理由＜育成したい資質能力：やってみたいことを表出する力、やりきったという満足感＞

中学部フェスティバル（以下・中フェス）は、学部全体で一つの劇を作り上げる中学部で毎年取り組んでいる伝統的な学習である。全員で取り組む演劇活動を通して、仲間とともに作り上げていく喜びや成就感、やりきった満足感を感じられるようにし、各々が自信を高めることをねらいとしている。

本時は第一次の事前学習であり、劇の内容を知り、どんな役を演じたいかを考える学習である。劇の内容を分かりやすく伝えるために『ペープサート』を用いて取り組む。演じたい役を考える場面では、物語を見て生徒たち自身がやりたい役、挑戦してみたいことなど自分の思いや意思を発信することを大切にしたい。



本時の目標

知技 中フェスに向けての見通しをもつ。

思判表 やってみたい役を表現する。

主体的 劇で演じる物語に興味をもつ。

支援の3つのポイント

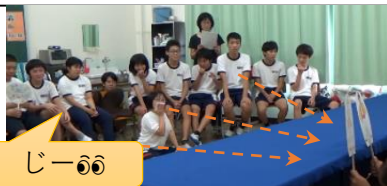
安心 中学部の仲間たちと一緒に学習

自信 みんなで共通の目標に向かっていくこと

発信 物語のイメージを捉えやすくするペープサート

心が動いた場面（抜粋）

ペープサートを見る



じー👁️

やってみたい役を考えながら物語を楽しんでいる様子。生徒が好きそうなキャラクターが登場し、笑いあり、ツッコミありの楽しい雰囲気の中でペープサートを見ることができた。



わっははは（笑）

第二希望を聞くとこ



どうしてもコレがやりたいなあ...

第一希望が重なったため、全員に第二希望も考えさせ、発表した。なかなか決められず、悩みに悩んだ末に、自分の思いに折り合いをつけ、決断できた。

うーん...うーん...(葛藤中)

役選びの場面



うーん...迷うなあ

（自分の希望かなうかなあ？）

黒板に提示された登場人物のそばに、自分の顔写真を貼ってやってみたい役を発表する場面。希望の役が友だちと重なったり、なかなか決まらなかったりと生徒たちの思いのせめぎ合いがあった。

お互いをゆったり見守れる仲間・関係性



仲間を見守る目👁️

なかなか自分の希望が出せない友だちに対して、「早く決めて」など、急かす事は一切なく、温かく見守っていた。これまでの活動を通して構築した仲間意識を見ることができた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

生徒たちがやってみたいと思えるように『アラジン』の物語をベースに、ピーターパンやドラえもんなど魅力的なキャラクターが登場する物語を披露した。結果として多くの生徒が物語に興味をもち、その中から自分のやってみたい役など「自分の思い」をみんなの前で伝えることができた。毎年行われる中フェスは見通しをもちやすく、特に三年生は主役への憧れや責任感をもって役選びをすることができた。

本時を受けて今後の学習活動では「やってみたい」と感じた役を実際に演じて「やりきった」と思えることがとても大切である。事後研究会においても、「自分たちでやった!」と思えるような支援・活動が必要であるという意見が出された。生徒の意見を聞きながらセリフや展開を決めていったり、劇で使用する背景、大道具、小道具、衣装を生徒と共に作ったりと「自分たちが劇をつくった」という達成感を味わえるような授業展開をしていきたい。

中学部 生活単元学習

単元名「クラスタイム～第二弾 太秦映画村へ行こう～」

発達年齢 1歳～8歳

1年3名 2年3名

計6名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：自分の思いを伝える力、友だちの思いを考える力>

クラスタイムでは〈計画→実行→振り返り〉のサイクルを年3回繰り返す中で、主体性や集団性、生活経験の広がりを経験する。今年度は『行ったことないところで、みんなで楽しむぞ!』をテーマに設定し、1回目(6月)はブルーメの丘に行った。その経験を生かして、2回目(10月)は太秦映画村を企画する。生活に必要な知識や技術の習得と合わせて、自分の思いを表現することや相手の気持ちを考えることの大切さを意識させたい。

本時は、事前学習の2回目で、具体的な体験内容を予算内で決定する。発達が幼い生徒にも理解できるように、下見動画などを活用する。「なんだか楽しそうだな」という期待感を引き出したい。やりとりができる生徒たちは自己主張が強いので、話し合いが行き詰まる場合は『みんなで楽しむぞ!』になるためにはどうすればいいのかを一緒に考えていきたい。

本時の目標

- 知技** いろいろな方法(パンフレット、下見動画・写真)を使って、太秦映画村の体験やレストランの情報を調べる。
- 思判表** やってみたいことを選び、伝えられる。
- 主体的** みんなで楽しめるクラスタイムになるように話し合おうとする。

支援の3つのポイント

- 安心** 自分の思いを受け止めてくれる集団での活動
- 自信** 1回目のクラスタイムでの成功体験
- 発信** したいことをイメージしやすい写真や動画の活用

心が動いた場面(抜粋)

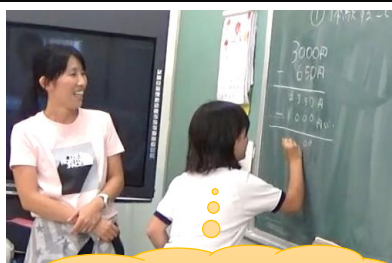
下見の写真や動画を見ているとき



むっちゃおもしろそう！
やってみたい!! (爆笑)

自分たちで選べる期待感で、どの生徒も画面に釘付け。特に、動画は分かりやすく、発達が幼い生徒も興味をもてた。どんなところに行くのか見通しがもてたことも安心感につながった。

ちょっとチャレンジできる場面



予算の計算あってるかな...
(ドキドキ)

アトラクションに使える予算を計算したり、その予算からどれを選ぶか考えたりと、少し難しい課題でも、クラスタイムの実現という目的があるから、挑戦したいという思いを引き出した。

自分の意見を受け入れてもらえた瞬間



僕もいいと思います

動画見ておもしろそうだったから行きたいなあと思ったんだけど...

○君も賛成してくれた!

体験するアトラクションを絞る過程で、自分の意見が仲間に受け入れてもらえ、どんどんうれしい表情に変わったAさん。仲間の反応を気にしながら発言した分、嬉しさがあふれた瞬間となった。

お化け屋敷に行くか、行かないか



...やっぱりお化け屋敷...行く...!

えっ! やっぱり行く!?
じゃあ、ばくも!

絶対に行かないと言っていたBさん。「みんなでいけば怖くないって」「俺たちが守るから」の言葉を受け、悩みに悩んで決断した瞬間。その決断に心動かす友だちもいて、クラスの絆を感じる場面であった。

深い学びへ導くために(成果と課題)

クラスタイムは本校中学部で長年にわたり、繰り返し取り組まれた伝統的な学習である。今回、研究授業として取り上げたことで、改めてその意義を再認識したと同時に、小学部や高等部の教員にもより深く認知される機会となった。中学部段階ならではの『仲間と共に乗り越える経験』や『自分の思いを伝える、相手の思いを聞いて考える』ことを積み上げていくことで、高等部での『自己理解や発信・対話する力』につなげるという系統的な視点は今後も大切にしていきたい。

生活単元学習という視点では「やりたい」という主張ばかりでなく、現実との調整(予算・時間など)の中で折り合いをつけながら自分で選択・決断する経験が大切だと感じた。どこかに出かける場合、これまでは保護者が(と)決めてきたであろう行き先・移動手段・過ごし方を、自分たちで決めて実現することの達成感は大きく、できた自信は次の意欲へとつながる。こうした経験を積み重ね、余暇生活や卒業後の社会生活の中で実際に活用できる力として身につけてほしい。

高等部 生活単元学習

単元名「修学旅行へ行こう 空、風、海、まるごと感じてめんそーれ沖縄」

発達年齢 3歳～14歳

1年8名 2年7名

3年7名 計22名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：共に楽しむ力・表現し発表する力・聴き感じる力>

高等部では2年に一度、2・3年生対象の修学旅行がある。沖縄方面に行き、沖縄の歴史、自然、文化を学習し体験する。テーマは「空、風、海、まるごと感じてめんそーれ沖縄」。事前学習では沖縄ならではの多くの学びを社会科、音楽科、家庭科を中心に取り組んできた。さらに1年生と合同で平和学習、出発式を行い、本時の事後学習では、自分が体験したことを振り返り、整理し、思いをそれぞれの表現方法で発表する。仲間や1年生の発表を聴いて、それぞれの思いをじっくり感じて欲しい。そして、互いの思いを感じあったり自分の思いと比べたりして、自分が体験したこと全てを思い出や経験へと深めていって欲しい。最終的に事前学習で感じた修学旅行に対する楽しみや期待、実際に体験したことへの感想、さらに1年生からのメッセージをつなぎ合わせ、一つの修学旅行の取り組みとして、高等部掲示板で発信させたい。

本時の目標

- 知技 自分の発表の仕方、担当の発表ができる。
- 思判表 自分の思いをまとめ自分なりの表現方法で発表できる。
- 主体的 仲間の発表に対して自分なりの感想がもてる。

支援の3つのポイント

- 安心 役割分担を明確にすることで見通しをもつ
- 自信 自分の発表を仲間の前で表現できる
- 発信 自分の体験や思いを仲間に伝える

心が動いた場面（抜粋）

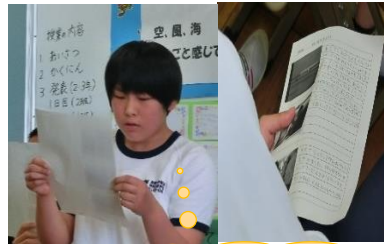
まるごと感じた体験



2・3年生は沖縄の空の下、仲間や先生と体験や見学、生徒によっては命がけのチャレンジをした。1年生は、入学後初めて1年生だけの水入らずの時間を過ごした。心揺さぶられる思い出ができた。

うわー、はじめて！

発表（伝えたい思いと聴いてくれる仲間）



楽しい体験があったからこそ、うれしい、誇らしい、伝えたいという思いがあった。仲間が聞いてくれていることを実感できたから、発表することが苦手の生徒も、自分の言葉で、報告できた。

緊張するけど・・・

聴く・見る（知りたい）



生徒が自分で選んだ写真と言葉だったからこそ、気持ちが伝わり、笑いやツッコミが起こる。生徒の聴く姿勢の良さや自然に拍手が起きたことが印象的だった。

うわー、すごい！

書いて思いを伝える



最後にお互いの発表に対してメッセージを書いた。3年生は1年生へ感謝の言葉を、1年生は修学旅行への期待が書かれていた。これらを貼り合わせ、写真と共に学部の掲示板に掲示し修学旅行のまとめとした。

ありがとう！

深い学びへ導くために（成果と課題）

今回の授業では、事前学習からのグループや学年、そして教師との様々な対話があって一人一人の発表につながった。特に、限られた時間の中で自分の思いを言葉にすることは、ある程度の枠組みがあることで、その中で自分が選択し、決定して言葉にすることができた。また、発表したい思いと話を真剣に聞こうとする思いから日頃発表することが苦手の生徒が堂々と発表できていた。課題として集団の中に入るのが苦手の生徒に事前の手立てが必要であった。最後に書いたメッセージカードから、宿泊が苦手の1年生の生徒が『修学旅行の楽しそうな映像を見て、僕は行きたいと思った。』と書き、3年生は、『マルチシート張り御苦労様でした。お陰で附幼交流ができました。これからも一緒にゆっくりやっていきましょう。』とあった。今後も高等部として仲間の思いを真剣に聴き感じ、誰もが安心して表現できる集団をつくることに取り組んでいきたい。

高等部 職業科（陶工班）

単元名「“ぼくの作ったお皿を販売します”

～製品に釉薬をつけよう～

発達段階5歳～8歳

1年1名 2年2名

3年2名 計5名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：主体的に丁寧に取り組む力>

陶工班では、小鉢や丼鉢、マグカップ等をたたら板を使ったり流し込みをしたりして作っている。友だちがしているのを見たり、仲間の励ましを受けたりする中で取り組む。本時は地域向け販売会や学校行事での販売のために、自分たちで作ってきた小鉢や丼鉢、タンブラー等に釉薬を付け、焼き上げて製品にしていける。買ってくれる人、買ってほしい人をイメージしながら製作し、製品を作る楽しさや作りきった達成感を感じられるようにしていく。



本時の目標

知技 釉薬のつけかたがわかるとともに、一つ一つの活動に集中して取り組める。

思判表 わからないときや作業を終えたときに丁寧な言葉使いで相談や報告ができる。

主体的 買ってくれる人を意識して、興味をもって最後まで活動できる。

支援の3つのポイント

安心 どのようにするのか活動がわかる。

自信 一つ一つの製品に釉薬を付けることができる。

発信 概ね、自分の思ったようにできて楽しい。

心が動いた場面（抜粋）

集中して取り組んでいる場面



小鉢や釉薬等に間いかけ働きかけている。対象物との対話と合わせて、自らに語りかけ、対象物との関係を築きなおしている。回数を重ねる中でだんだんイメージ通りにできていった。

どうやったら上手にできるのかな・・・

上手に色付けできた時



友だちのやり方を見て、こうやってやったらいいのかなあ、と自分と対話しながら、方法を工夫している。お互いのやり方や協力、表現を交流している。

お～！ うまいじゃん！

先輩と後輩のペアでの活動



経験のある上級生と後輩が対話をしながら、釉薬の色を決めたり、釉薬を協力して溶かしている。底に釉薬が沈殿して固まり、なかなか溶けずに苦労をしている友達に対して手を差し伸べたり、声援を送る姿があった。

お願い！
そっちの端を混ぜて！

高等部ならではの振り返りの場面



他者との対話を通して、自分のしたことを吟味する。やり終えた結果に満足したり、できなかったことにも気づいたりする。次回へ向けて評価できるようになる。

ここは頑張ったよ
ここはもう少しかなあ・・・

深い学びへ導くために（成果と課題）

右上写真、右側の男子生徒の手元を見ると、友だちがしている姿を見ながらも、手はお皿を持っているしぐさである。友だちがしているのを見ながら自分で考えて、対話して、工夫をしているのが窺える。このようにできあがりイメージしたり、やり直したり、失敗したりしながら工夫を重ねていくことが大切だと考える。

生徒が集中している時は、教師の言葉がけは自然になくなった。やり終えた後の表情や「できました」の報告から、生徒が自分のイメージ通りにできたか、達成感を感じているかを読み取るようにした。

自分たちが作った製品には、裏に自分のマークを付けている。自分の作ったものがどのような製品になったのかがわかり、それが売れた時は喜びがあり、感動もある。こんな人を買ってほしい、家族に買ってほしい、使ってほしいという思いを育て、誰かの役に立っていると思える経験や、したことが評価されることを積み重ねていくことが重要だと考える。

高等部 体育科

単元名「みんなが楽しめるフラッグ運動の演技を創ろう」

発達年齢 5歳～14歳

1年4名 2年3名

3年4名 計11名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：自分や他者との対話を通して一つのことを創り上げる力>

「みんなが楽しめる」をキーワードにすることで、自分がやりたいことを優先させるのではなく、苦手な人でも参加できるということを考えられるように意識付けしていく。自分や他者と対話しながら演技の練習をすることで、やることを変化させながら、より良い演技を創っていけるようにしたい。本時では、フラッグの演技を考えやすいように、8×2のカウントで演技ができるような写真カードを用意してある。たくさんある技の中から様々な組み合わせを考えて、オリジナルの演技を創っていけるようにする。また、iPadを使い、動画撮影して見返すことで、自分たちの演技を客観的に見て、演技を自発的に改善していけるようにしたい。対話をしながら演技を完成し、運動会という大きな舞台上で発表することを目標にすることで意欲をもって取り組み、練習の努力と、友だちとの協力、目的達成の充実感を味わえるようにしたい。

本時の目標

- | | |
|-----|-----------------------------------|
| 知技 | グループで考えた演技を練習し、表現運動の楽しさを感じる。 |
| 思判表 | 曲のリズムに合わせて体を動かし、友だちと動きを合わせようとする。 |
| 主体 | 話し合い活動に参加し、意見を出したり、友だちの意見を聞いたりする。 |

支援の3つのポイント

- | | |
|----|--------------------------|
| 安心 | 本時の展開を説明し、学習の見通しをもたせる |
| 自信 | 写真などを用いて、生徒がわかる環境を整える |
| 発信 | 自分ではなく、友だちの良かったところに目を向ける |

心が動いた場面（抜粋）

グループでの話し合い活動



この技はここにしよう。
この技も入れたらどうかな？

技を写真で説明したカードをもとに、自分たちで技を考えることができた。ダンスなどのリズム運動が苦手な生徒でも、カードを手掛かりに話し合いに参加していた。

やりたい技がみんなに入れてもらえない



僕はロケットって技を入れたいんやけど。
うーん・・・

自分のやりたい技をみんなが納得してくれず、行き詰まっている。どうやって説得しようか。それともあきらめようか... みんなのことを考える中で気持ちに折り合いをつけていた。

自分たちの動画を撮影・確認！！



右と左がバラバラだ
そろえたほうがいいね。

自分たちの動きを客観的に見て改善するべき点に気が付くことができた。また、どうしたらいいかを話し合いで確認し、次に繋がる工夫を自分たちで考えられたことが良かった。

完成した演技を動画に撮影した後は？



やったあー！完成☆

話し合いに苦労していたグループが、決定した演技を動画撮影した後に、「やったあ！」と言ったり、拍手をしたりして、完成したことを素直に喜び、演技を創った達成感を味わうことができていた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

成果としては、生徒たちの力で運動会の演技を創り上げていくという視点が良く、そこに向かうための技カードが分かり易くてよかった。また、運動会で実際に演技の練習をしていくにあたって、生徒たちの意欲や取り組む姿勢が大変良く、普段の体育には参加しにくい生徒も頑張って参加するなどの場面もあった。一方、話しにくい生徒への支援や意見を出しにくい生徒にも意見が出せるような話し合いのルールを設けたり、一人一つの技を選ぶという条件を示したりして、全員が参加できる形を模索できると良かった。10月に開催された運動会の演技では、自分たちで創った演技を真剣に、楽しそうに表現していた。生徒とビデオを見て振り返りをしたときは「友だちと息を合わせて頑張った。」「演技をいろいろな人に褒められて嬉しかった。」と言っており、一つのことをみんなで一緒にやり遂げるという経験と、目的達成の充実感を存分に味わうことができた。今後もみんなで何かに向かって試行錯誤していけるような活動を心がけていきたい。

高等部 生活単元学習 単元名「にじの家合宿に行こう」

発達年齢 4歳～8歳

1年2名 2年2名

3年3名 計7名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：自分で考え、やり遂げる力・仲間を思いやり、助け合う力>

毎年行われるこの合宿について、2、3年生は昨年度までの経験から、生活に関わる全てを自分の力でやり遂げることを意識している。また、1年生については小・中学部での合宿の経験をもとに概ねイメージをもち、高等部での初めての合宿にも意欲的に取り組もうとしている。合宿では、将来の自立した生活に向けて、助けを必要とするところは助けを求めながらも、自分のことは自分でやり遂げることを目指している。本時は、それぞれの生徒の実態や課題に合わせてねらいをもちながら合宿の目標と夕食メニューを決めていく。1、2年生については活動の内容が分かり、見通しをもって取り組むことを目指す。3年生については、3年間の積み上げの成果を発揮して、自分でできることを少しでも増やせることを目指していきたい。



本時の目標

- 知技** 自分に合った夕食メニューを選び、その材料や作り方を
知る。
- 思判表** お互いの意見を尊重しあい、よりよい合宿にしようとする。
- 主体** 自分の生活を振り返り、合宿にむけて自分の目標を立て、
意欲的に取り組むことができる。

支援の3つのポイント

- 安心** 写真や日程表等により見通しをもたせる
- 自信** 自分にできることの体験を積み重ねる
- 発信** それぞれの意見を交流できる場面の設定

心が動いた場面（抜粋）

目標を考える場面



なにをがんばろうか
なあ

3年生は高等部での最後の合宿ということもあり、「自分で」という自立した生活を目指して目標を考える。1、2年生も昨年の合宿を思い出しながら合宿に取り組む意欲を見せる。

Dさんの思い



一人で寝られるの
に、なんで？

小学部から合宿を経験しているDさん。一人で2階の個室で寝られないということを知り、自分は個室で寝たかったことを涙で訴えるが...なかなか言葉で伝えられない。

Dさんを見守る周りのクラスメイト



声をかけようか...
やめておこうか...

Dさんの様子を見て、声をかけるEさんや、タイミングを見計らっているFさん、だまっで見守るGさん。自分に何ができるかそれぞれが一生懸命考えていた。

夕食メニューを考える場面



どんな料理つくろう
かなあ？

Hさんは家庭科の資料やノート、教師のアドバイス等を参考にして、自分の作ったことのある料理や、作れそうな料理を調べて、夕食メニューを決めることができた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

この合宿は以前より小・中・高等部を通して段階的に行われてきたが、今回のDさんの件により、学部間での情報交換をすることの重要性を痛感した。中学部の合宿で経験できた「一人で寝る」ことに自信を持って取り組もうとしたDさんの気持ちに気づき、周りの生徒に知らせることができていたなら、もっと仲間の思いをクラス全員で共有できていただろう。また、周りの生徒の思いとしては、先輩として自分の経験を語り励ますEさんや、自分の目標を考えながら何度も心配そうに見ていたFさん、最後の合宿を絶対に成功させたい思いで目標をいくつも掲げていたHさんなど、それぞれが仲間や教師、自分自身との対話によって課題と向き合い、乗り越えようとする姿があった。授業後にDさんの思いを周りの生徒にも理解してもらい、合宿当日にはDさんも気持ちを切り替えて仲間と助け合いながら頑張ることができた。このような経験を積み重ねながら、今後それぞれの目標を適切に設定できるようにしていきたい。

高等部 国語科

単元名 「わたしブックを作ろう」

発達年齢 6歳～8歳

1年2名 2年2名

3年3名 計7名

単元設定の理由 <育成したい資質能力：自分のことを知り、自分のことを伝える力>

本グループの生徒たちは、自分に自信がなく、積極的に自分の意見を話すことが少ない。また、幼さが故に自分自身のことをしっかり見ることができず、実際にはできていないことも“できる”と評価するなど、自己理解の弱さが見られた。そこで、自分のことについて書かれた絵本を使い、自分を見つめ取る授業を展開した。本時では、絵本「ぼくだけのこと（森絵都：作）」（注1）を用いて、自分の「ぼくだけのこと」について考える授業を行った。まずは友だちと交流する時間を設定し、いろいろな視点から「ぼくだけのこと」を考えられるようにした。友だちの視点、自分の思いから自己理解につなげ、世界に一人だけの自分は大切な存在であることに気づかせたい。



本時の目標

知技

絵本の内容を理解し、自分の存在に誇りをもつ主人公の気持ちを読み取ることができる。

思判表

友だちの意見を聞き、自分の「ぼくだけのこと」について考えることができる。

主体的

友だちとの交流を通して、自分だけのことに気づく。

支援の3つのポイント

安心 わかりやすい絵本

自信 自分について考え、自分のことを知る

発信 グループ活動の設定

心が動いた場面（抜粋）

絵本の読み聞かせ



どんなぼくだけのことがあるのかな？

「どんなぼくだけのことがあるか、後で聞くからね」と話し、絵本の読み聞かせを行った。一回しか聞いていないが、内容を理解できていた。絵本に抵抗をもたず、楽しみながらお話を聞けていた。

友だちのことを考える



ピアノが上手だったなあ

友だちの「ぼくだけのこと」を考える時間では、自然と友だちのいい所探しが始まった。友だちからどう見られているのか、コメントをもらいそれぞれが笑顔で対応する姿がみられた。

自分のことを考える



自分だけのことって何だろう？

友だちからどう見られているかを踏まえて、自分について考えた。絵本を読んだことで、身近なところから自分のことを考えていた。いいことだけでなく、できないことも振り返り書くことができた。

付箋を使った交流



ねえ、なんて書いてるの？ちょっと見せて。

意見交換には付箋を使った。何が書いてあるんだろうという期待感があり、付箋をもらったときに、どこかホッとした表情を浮かべていた。付箋を渡すやりとりで、自然と交流も生まれた。

深い学びへ導くために（成果と課題）

今回の授業前に「いい所リスト」というアンケートを行った。自己肯定感が低いのではないかと予想だったが、たくさん〇を付ける生徒が多く、実際には自分についてよくわかっていないのではないかと感じた。「ぼくだけのこと」を考えるために交流の時間を先に設定したことで、友だちを通して自分自身に気づくことができた。自分について気づくことで、また周りの人のことに気づくようになっていくのではという意見があり、自己理解は集団の中で形成されていくものだと感じた。その後の授業で、自分の好きなことや嫌いなこと、できることできないことなど、さまざまな視点で自分について考えさせた。改めて考えるとなかなか見つからない生徒もいたが、どの生徒も楽しそうに考えていた。小さなことでも自分にはこれがあるということが、生きがいにつながり、さらにはやりがいになっていってほしい。



佐藤先生研修会の様子

令和元年8月22日（木）

佐藤比呂二先生（東京都立港特別支援学校）

<『ホントの願い』をつかむ

～子どもの心に寄り添うとは～>

佐藤先生の今までの実践の中で、特に自閉症の子どもたちとの関わりから多くの気づきを得たということ、映像や具体的な場面を交えながらユーモアのある語り口で話していただいた。子どもたちとの密な関わりの中で、時間をかけて子どもの心に寄り添い、表面に表れるこだわりや自傷などの行動を「問題行動＝困った子」と捉えず、問題行動の裏には子どもの「ホントの願い」があるのだということに気付くこと、また、子どもの願いに寄り添って関わることの大切さについて教えていただいた。

パニックになるのは「自分の意志や意図」と「相反する相手の意図や現実」のぶつかりあいであり、折り合いをつける力をつけていくことが必要になってくる。その為にはまず受け止めること、パニックになっても大丈夫という寄り添う大人への信頼と安心感を持てる必要があるのである。そして気持ちを受け止めてもらえたら、自分から折り合いをつけようとする姿が生まれてくるのだ。佐藤先生の話聞き、子どもたちとの関わりへの新たな気づきを得ると共に、それぞれが日頃の取り組みを省みる機会ともなった。



名古屋先生研修会の様子

令和元年9月10日（火）

名古屋恒彦先生（植草学園大学）

<生きぬく力につながる授業づくりや単元づくりとは>

名古屋先生からは、学習指導要領の改定に伴う、特別支援教育における考え方や意味するところについて教えていただいた。歴史的な経緯を経て、新指導要領は通常の教育も含めた大きな変革の中で公示され、新しい流れの中で、生きる力が大きく位置づけられているということである。知的障害教育は、生きていく為に必要な力として教科を捉え、また、合わせた指導は、知的障害教育の専門性の中で重要である。生活単元学習については、良い学習が展開できれば、それは質の高い主体的、対話的で深い学びであり、質の高いアクティブラーニングになるとのことだった。生活単元学習が本物になればなるほど生活の中で発揮したい力というのは子どもたちが必要としてくる。それを支えていくことでその力がよりよく発揮される。

深い学びというのは、活用できる力になっているかということである。力をつけてできるようになるのではなくて出来る状況をつくってより良くできるようにしていく。力は発揮されることによって身についていくものであり、生きる力を発揮できる状況を作っていかなければならない。そのために生活を整えていくことが必要であるとのことだった。また、本当の意味の自立とは、支え、支援があつてこそ自立なのだということ。今後の子どもたちへの支援の在り方や、授業研究会に向けて、名古屋先生から多くの示唆をいただくことができた。



参考文献：アップデート！各教科等を合わせた指導 名古屋恒彦編著 東洋館出版社

編集後記

本校では、2018年度と2019年度の2年間、研究主任・研究部員を中心に、研究のテーマや方向性などについて議論を重ね、授業実践を積み重ねてきました。本校教員全員が授業研究をするにあたっては、学部を中心にして検討を何度も重ね、知恵を出し合って進めてきました。その結果、生活年齢での視点を明らかにすることができました。まさに本校教員による手作りの研究成果と言えるのではないのでしょうか。この研究成果は、地域の園や小中学校・特別支援学校での取り組みの参考として頂けるものと確信しています。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、東京都立港特別支援学校 佐藤比呂二先生、植草学園大学教授 名古屋恒彦先生には、研究の方向性をご示唆・ご指導いただきました。また、本学教育学部障害児教育講座の先生方をはじめ、たくさんの方々にご指導をいただきましたことに対しまして厚く御礼申し上げます。本研究は道半ばであり、今後とも私共に対し各方面から、引き続きご指導いただきますようお願い申し上げます。

滋賀大学教育学部附属特別支援学校 副校長 丸田尚志

研究同人

学校長	若林千春	副校長	丸田尚志
研究主任	和田佑子	副主任	森あゆみ・梶谷素女

○学部研究（★印＝チーフ）

【小学部】

小松未央★ 重田美和 清水研吾 志賀元紀 森あゆみ
山本顕典 辻川皓輔 水村浩樹 内田とし子 山本祐美

【中学部】

菊池友恵★ 福谷芳恵 和田佑子 寺田慧 武田義弘 篠原逸子
森野達也 米山知祐 下飼志保 木村明子 井口貴之

【高等部】

巻幡知栄★ 定森多貴★ 花木誠 堀口毅 成田豊 梶谷素女
森下靖規 都賀敦子 下紺晃季 小島睦 石部和人

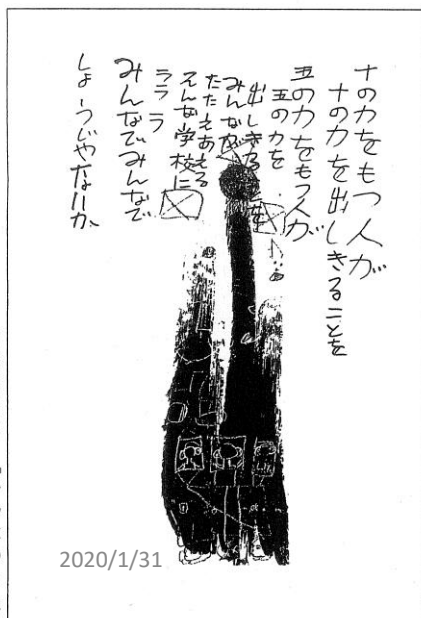
○大学教員

窪田知子・川島民子（小学部助言）
白石恵理子・江原寛昭（中学部助言）
松島明日香・羽山裕子（高等部助言）

編集・発行
発行日
印刷所

滋賀大学教育学部附属特別支援学校
令和2年 2月13日
社会福祉法人 いしづみ会

〒520-0002 滋賀県大津市際川三丁目9-1
〒520-0027 滋賀県大津市錦織二丁目9-28



学校教育目標 「生きぬく力をめざして」

- たしかに 見通しがたしかにもてる子
(毎日の生活の積み重ねの中で)
- まろやかに 人を思いやるまろやかな子
(仲間とのふれあいの中で)
- たくましく 心もからだもたくましい子
(心とからだのリズムを整えて)